

「土地・法・不安」が切り開く地平：コメント・総括

石垣, 直
沖縄国際大学

<https://doi.org/10.15017/2344483>

出版情報：九州人類学会報. 38, pp.54-55, 2011-07-10. 九州人類学研究会
バージョン：
権利関係：

「土地・法・不安」が切り開く地平

—コメント・総括—

石垣 直 (沖縄国際大学)

はじめに

私は、九州人類学研究会の第9回オータム・セミナー(2010年10月30日~31日、於:福岡)にコメンテーターとして参加する機会をえた。以下では、初日に行われたセッションA「土地・法・不安—「開発」に揺れる人びと—」の各発表に対する私のコメント概要を整理し、当日の諸研究発表の意義・問題点についてあらためてまとめてみたい。

各報告の内容

まず、本セッションの企画者でもある松岡陽子氏(名古屋大学大学院)が、「希望のない土地」と題し、ケニア農村地帯に成立したスラムの状況を報告した。松岡は、植民地政府が対マウマウ戦争のために設立した「新村」、後の土地私有化プロジェクトによってマーケットの周りに形成された「ゲサギ」(「スラム」、「新村」の意)を事例に、賭博、暴力、売春が横行する状況を、当該地域のシングルマザーの存在に注目しながら描き出した。松岡いわく、ゲサギの人々は、将来を計画することもなく、暴力、嫉妬、不信が渦巻く日常を生きており、そこでは「不安」が「安定」しているという。

つづいて、清水貴夫氏(名古屋大学大学院)が、「茶会がつなぐキズナ」と題する報告を行った。清水の議論の題材は、都市計画により土地を追われた西アフリカ、ブルキナファソの事例であった。清水は、成人の男性たちが「茶」という嗜好品を用いて毎日のように開く「茶会」が、人々の情報交換の場であると同時に、土地を追われ離散したかれらの「不安」を和らげ、コミュニティを再構成する機

能をもっていると論じている。

ティー・ブレイクの後、高野さやか氏(東京大学大学院)が、インドネシア・東スマトラの土地紛争を事例とした報告「土地をめぐる期待と不安」を行った。高野が注目したのは、かつて支配層と住民とのあいだに土地の租借契約が結ばれ、その後に土地の国有化がなされた東スマトラにおいて、近年、人々が土地に対しどのような要求を掲げているか、という点であった。高野は、土地紛争の争点が「アダットの土地」から「スルタン租借地」に移行している状況に、人々の「未来に対する構え」の変容を見出そうとしている。

最後に、木村周平氏(富士常葉大学社会環境学部)が「土地と大地をめぐる不安について」と題する報告を行った。同報告は、1999年のトルコ大地震後の耐震都市計画を題材とし、プロジェクトの実施者、住民、観察者(木村自身)が「不安」というキーワードで「繋がっている」状況を描き出そうと試みている。木村には、「不安」に着目することで、事態が「解決」することなく継続し続けている現地社会の状況を注視し、そうした現実を人類学的な知はどのように捉えるべきなのかを考えたいという企図があったようである。

コメント・総括

以下では「コメント・総括」として、各報告に共通する、正・負の評価を含む諸点についてまとめてみたい。

第一に、四つの報告は、その対象地域が東南アジア、中東、アフリカ(西/東)と異なるものの、いずれもが為政者によ

る「土地」や住人への統治が、その「法」制度や政策の実施を通じて人々に「不安」や「希望」を抱かせている状況に注目していた。こうしたスタンスにおいて、松岡はゲサギの女性たちの生活を憂い、清水は人々の交流を後付けながら「茶会」の機能を肯定しようとする。また、高野は土地紛争をめぐる状況を歴史的な視点から整理し、土地と法をめぐる新たな推論が生まれてくる背景・状況を描き出した。そして木村は、大地震後の都市耐震プロジェクトをとりまくさまざまなアクターの「不安」に注目することで、人類学的記述・分析のあり方を再考しようとしている。そこには、同時代を生きる人々の「生」を、その複雑な状況を捨象することなく描き出したいという各報告者の努力がうかがえる。私は評者として、この点を高く評価したい。

しかし、第二点として、これらの報告を聴いて私が最も気になったのは、「不安」という言葉の用い方であった。いずれの報告者も現地社会にみられる「不安」、あるいは為政者や調査者をも含めた「不安」について語っていた。しかし、各報告者に対するフロアならびにコメンテーターからの質問、そして発表後に行われた質疑応答で明らかになったのは、各報告者が語る「不安」とは、必ずしも現地の人々が現地語あるいは調査者とのあいだのコミュニケーションにおける翻訳語

として実際に発した言葉ではなかったという点である。たしかに、人類学的な研究手法としては、現地で聞かれる語りの「奥に隠れているもの」をあえて分析者が描出する・言語化するというスタンスも十分に意味がある。ただし、そこには分析者による「過剰な読み込み」という危険性も存在する。構造分析、象徴論、抵抗論など、こうした「読み込み」に賛否両論が寄せられてきた歴史を踏まえ、評者・コメンテーターとしてはあくまでも、現地の実情・人々の語りに即した分析の重要性をあらためて強調しておきたい。

おわりに

以上本稿では、九州人類学研究会・第9回オータム・セミナー、セッションA「土地・法・不安—「開発」に揺れる人びと—」の各発表の内容について簡単に紹介し、私がコメンテーター役として当日に述べた諸点をあらためて整理した。調査地域や注目した事象はそれぞれに異なるものの、各報告はたしかに「土地」・「法」・「不安」・「開発」という諸トピックにおいて共鳴し合っていた。こうした地域やテーマをまたいだ報告会・研究会が、人類学および関連分野に新たなムーブメントを生み出して行くことを期待したい。

(2011年6月7日 掲載決定)